
こいつに友達がいないのはもったいない

一徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいつに友達がいないのはもったいない

【Nコード】

N7699U

【作者名】

一徒

【あらすじ】

もう一度懲りずにやってみよう。

『僕は友達が少ない』アニメ化の前にやってしまった投稿。
肉（柏崎星奈）を恋人にしたいとい目的だけでやったのでノーブランです。

よろしくお願いします。

小さい頃の約束

白い髪をしてか、冷めた性分からか、小さい頃は友達と呼べる人はいなかった。

家に帰っても家族は滅多に帰らずいつも一人

学校でも「氷のようだ」と言われいつも一人

誰が何を言っても訴えず、主張しない。イジメの対象になるのは早かった。

校舎裏でテレビでやるようなヒーローの必殺技を真似るクラスメイト。

くだらない、ああくだらない。

殴り返して殴り続けて、先生が来る頃は自分以外誰も動かなかった。

余計に理解されなくなり一人でいる事が増えた。

苦痛は無かった。ただめんどくさくて、誰かといるのが嫌だった。

そんな気持ちを無視して女の子が近寄ってきた。

金色の髪をした妖精みたいな綺麗な女の子。ただし性格が残念で女の子といえるのを見たことがない。

ただ、いつもクラスどころか男は皆こいつの傍にいた。そんな女の

子が俺の前にたってこう言った。

「—————」

思い出せない。違う、真剣に聞いてなかったから覚えてない。だから空を見ながら適当な事を言っただけだ。

「大人になって、一緒に結婚したらね」

大人になる頃なんてずっと先。だから適当……の、筈だったのに。

「わかったわ」

顔を真っ赤にして女の子は答えた。

「大人になってホントに結婚したら、約束を守って」

この日二人は

いつかお互いが、大切な、大事な存在になる事を二人は知らずにずっと続く未来の約束をした。

「なんて言うかあほー！！！」

真っ赤に照れた少女は平手打ちを少年にかまし、脱兎の如く教室から飛び出した。

ずっと続く未来の約束をした

……等。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）（前書き）

これ書くの忘れてました。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）

小鷹は言った『これは幻覚だ』ってな……

綺麗な海、トロピカル、フラダンス、ヤシの実……誰もがイメージする常夏を代表するものをかき集めたような南の島に俺達はそこにいる。

そんな楽園を『隣人部』は満喫していた。

ビーチチェアに座っているのは見た目がヤンキー（くすんだ金髪が自毛とか泣ける）だが隣人部では唯一と言っていい一般的な常識を持つ男。

『羽瀬川小鷹』
はせがわ こたか

彼の視線の先には二人の小さな少女が仲良く砂のお城を作っている。

一人は羽瀬川小鷹の妹で外人の血が多く混じったようで小鷹とは似ても似つかない金髪美少女。

『羽瀬川小鳩』
はせがわ こはる

彼女より少し小さい銀髪でブルーの瞳をした十歳くらいの幼女。しかしれっきとした聖クロニカ学園に勤務するシスターで『隣人部』

顧問

『高山マリア』
たかやま

予め言っておくが、羽瀬川小鷹はロリコンでは無い。
近親〇〇の歪んだ恋愛事情も彼には無い。

あれだよ？小さい子を見て卑しむ・・・じゃない、癒されるんだよ？
・・・多分な。

気を取り直して周囲を見回すとパレオの付いた可愛いセパレート水着を来た華奢な人間が小鷹にトロピカルジュースを渡していた。

『楠幸村』

華奢な姿で綺麗な容姿。・・・だが男だ！
コスプレが似合い、羽瀬川小鷹を敬愛する存在。・・・
・だが男だ！

Dメールを送らない限り彼は彼女にはならない。

そしてその隣のチェアに座ってBL同人誌を読むポニーテールでワンピースの水着と白衣を着る少女

『志熊理科』

まともな人間の姿をしているが狂気のマッドサイエンティスト・・・
って訳じゃない。

・・・作るのがたまにヤバいだけ。

「あゝ、楽しかった」

「気持ち」

海から上がってきた二人の少女がこちらにやって来る。

鋭い目つきの黒髪少女

『三日月夜空』
みかづきよぞら

セクシーとか萌えから掛け離れた白と黒の縞模様のフルボデイの水着。夜空は小鷹の元へ行き、彼のジュースを飲む。小鷹が「返せ」と言っつて夜空と触れ合うが、完全にじゃれてる感じで甘々とした空気が二人の回りを覆う。

「何処見てんのよ」

派手なビキニ姿で金髪碧眼のスタイル抜群の美少女

『柏崎星奈』
かしわざきせな

チエアに横になる俺の首に抱き着いて耳元で囁く。

「夜空じゃなくて『恋人』の私をみなさいよ」

豊満な胸を俺の胸板に擦り合わせて、内股で片足の太股を挟む、俺も星奈の腰に手を回し、どちらともなくお互いに深いキスをする。

夜空が小鷹にキスをせがむのも幼女とシスターが互いに「こどもにはまだ早い」と目を隠しあってじゃれる姿も全く気にならない。仲間がいて、恋人がいる現実が充実した『リア充』そのもの。

だが、ただの夢だ。さて、起こしてやるうか。

ガンツ！！

「うおっ！？」

椅子を蹴り、朦朧としていた意識が戻ったのか小鷹は椅子から転げ落ちた。断じて椅子を蹴ったら威力が強すぎて椅子ごと吹き飛んだんじゃない。

「一人でトリップすんなよ？小鷹クウン」

人の不幸って何故こんなにも楽しいんだろう。俺はにこやかな笑顔で死屍累々の部員を見つめている。

「……楽しい幻覚を見ていた……」

「どんな幻覚だったんですか？」

どこか狂気を孕んだ引きつった笑顔の志熊理科は聞き返す。

「黒髪（夜空）と星奈が仲良く笑顔で戯れる夢だよな」

「………なんで知ってたんだ？」

「覗いたから」

「どつやって!?!」

「相変わらず魑魅魍魎も真っ青な人ですね、非科学的過ぎますよ…」

「人類とは科学では説明しきれないもんだぜ 君」

「志熊です。いい加減名前で読んでくださいよ先輩」

「まあ、二人が仲良く笑顔でっつのは無いな、現に今だっつて」

「そろそろ辛くなってきたのではないか?降参した方が身のためだぞ肉……」

血走る瞳の三日月夜空

「ふふふ……そっちこそギブアップしたら?息が上がってるわよ?」

同じく血走る瞳の柏崎星奈

で、二人して目の前の鍋に箸を突っ込んで真っ黒い『何か』を口に含む。

「うぐ……っ」

「ぐえ……っ」

二人して酷い声だな。

「が、があっ、あぐあっ、辛っ、うがあっ!」

苦悶の表情で喉を掻きむしる夜空

「うっ……うっ……甘い……よっな、違っよっな……口の中が
ねばねばして……喉が腐っっていく感じ……キモチ、ワルイ……」

白目を剥いて星奈がダラダラと滝のような涙を流す。

……とりあえず汚ねえ。

「なんでこうなったんだっけ?」

俺は現状の説明を小鷹に求める。

「えっと、鍋……の筈だ……」

地獄絵図じゃねえか。

左には銀髪シスター（マリア）と金髪ゴスロリ（小鳩）が折り重な
って悪夢にうなされている。

黒髪（夜空）と星奈に挟まれてんのは天然（幸村）

。箸は動いているが何も掴まず目が死んでる。

「幸村……お前まで逝ったか……」

沈痛な面持ちの小鷹に悪魔がやってくる。

「「貴様の番だ」」

黒髪と星奈に引き込まれ、泣きそうな顔で鍋に向かう小鷹。ああ、俺を見るな助ける気なんか無い。

俺は満面の笑顔で手を振った。

こいらはやっているのはようは『闇鍋』だ。星奈がギャゲーで友達同士で鍋パーティーをやる場面を見て「一緒に鍋を食べるといっはいかにも仲のいい友達という感じでいいな」といった。そしてそれに二人も同意。

そこから鍋をやるときの予行練習を部室でやることになったらしい。

で、小鷹はなんか勘違いして黒いスープを作り各自が一齐に食材を鍋にぶち込み闇鍋スタート。

そして現在。

俺が星奈にメールで呼ばれるとこの惨状だ。

黒髪と星奈は責任転嫁しながら喧嘩を始め、いつの間にか『最後まで生き残った奴が優勝』とか言うルールが追加されたらしい。

状況を振り返っていると、が逝った。最後の一言は『消毒用エタノール』ってなんのことだよ。

「す、すまん」

俺は換気して雑巾を取りに行った。

雑巾を小鷹に渡し、金銀と後輩二人を空気のまともなところに置いて、
んで俺は何も食ってないのに廊下でぶっ倒れた。

……… 空気が限界 DEATH 。

聖クロニカ学園敷地内の礼拝堂チャペルにある一室『談話室4』。
ここが彼等『隣人部』の部室だ。

活動はイロイロ、各々好き勝手に時間を潰したり、雑談やゲームを
やったり作ったり、小説を書いたり漫画を書いたり、楽器、芝居、
漫才の練習や知らない人への声をかける練習など……

活動内容から何するのか全く理解できない部活だか、ようは『友達
作り』らしい。

ん？何故こんなにも他人事のように話すのか？
まあ、性分でもあるんだが……… 重要なのは………

.....俺入部してないんだよね、だから闇鍋食わなかったし。

これは俺、『真白縁』ましろえにしの隣入部観察のお話

P.S.

入部してないけど星奈がスゲー噛み付いて一応『仮入部』扱い。

ちなみに柏崎星奈が幼なじみで小さい頃からずっと一緒。
ただし小鷹の幻覚ような恋人関係では無い。
ただし星奈本人が俺をどうみてるか不明。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）（後書き）

感想まっています。

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです(前書き)

更新を忘れていたのではなく、ISの更新が難しかった事を信じて
ください

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです

放課後、屋上で寝てたらどうも星奈からメールと電話が大量にきた。

「うるさいだろうなあ・・・」

無視したいけどメールが段々と泣きそうになってて直接会わないと不味い気がしてきた。仕方なく俺は星奈がいそうな場所へと進んでいく。その途中で二年五組の前を通ると笑い声が聞こえた。

「ははは、本当にあつたんだってー」

「ええー、違うよー、やだなー」

「そんなこと言ったら私が好きになっちゃっぞー」

誰かが話してる・・・『一人』で

携帯とかだと思ったが、少し気になったので相手に気がつかれないように教室を覗いてみた。

教室には藍色がかつた黒髪でロングヘアー
うちの幼なじみに比べてかなり細身のスタイル（平均的なんだろう
がアイツのを見てるから全部ちっちゃく見える不思議）

多分顔は美少女。名前は・・・知らない。まあ、二年五組の生徒だ
ろう。

「あはは、そんな事言っただって騙されないぞー」

とりあえず携帯で話してる様子はない。

・・・誰と話してんの！？

一人で教室に残って会話とか怪しいよ黒髪さん！

まさか幽霊的な者か！？同じ学校にそんなハイスペックな美少女が
いたとは！うわああああ！！えらいもんに遭遇したー！！

「トモちゃんったらー、冗談ばかりー」

トモちゃん！？まさか10年前に教師と恋愛関係になったが親が認めてくれず教師と一緒に蒸発したという悲劇の少女『朝長美咲』さんか？！

二人とも生きてます。二人でオーストラリアで幸せな生活をしていますよ。

「遊園地は楽しかったよな」

遊園地！？同級生気取りか！？ いや、それとも開校初期に男子生徒と清い交際していたが体育教師のNTRで牝奴隷へと変えられてしまった。『涼宮智子』さんなのか！？

全くのでたらめで交際もNTRなんてものもありません。むしろ噂が流れた初期の体育教師は被害者です。

あああああ！！えっっらいもん見ちまったあああ！！

ヤバイヤバイヤバイどうすんの？どうすんの俺！どうなっちゃっの！？

いや待て！まだ黒髪さんは気がついていない筈・・・ならやる事はただ一つ！

俺は教室とは反対の方向へ全力で逃げ出した。走る途中、教室へ向かう金髪のヤンキーみたいのがいた気がしたが俺は彼を無視して外へと飛び出した。

学園の入り口付近でメールを打ちながら歩く少女。金髪碧眼で整った顔立ち、そしてどこか気品のある少女。細身なのに胸が大きいというグラビアアイドル並みのスタイルを持ち、顔好しスタイル好しで部活中の男子生徒の視線を一点に集めていた。

一応、この作品（二次）のヒロイン扱いをされる柏崎星奈^{かしわきほしな}である

「まったく信じられないあの馬鹿・・・」

不機嫌な顔でため息を吐く柏崎星奈は文句を言いながら一人校門を歩く。男子の取り巻きを散らせていつものように幼馴染と帰る筈だったのに、その幼馴染と連絡がつかない。

「携帯つてのは電話でなきゃ意味ないつつつのばあーか」

一人で悪態をつきながらもひたすら電話とメールを幼馴染に繰り返す。

留守電1回目 「もう、何度目だと思ってるのよこのバカ！早く電

話よこしなさい」

メール1回目 『アタシを探して合流しなさい』

留守電7回目 「聞いている？メールでも電話でもいいから連絡ちよ
うだい？・・・待ってるからね？」

メール7回目 『今ドコ？メールか電話で連絡ちようだい。近くで
合流しましょ』

留守番16回目 「留守電もメールも聞いているわよね？届いているわ
よね？・・・お願いだから返事してよ・・・待ってるからね？」
メール16回目 『忙しかったらごめんね？メール見てくれてるわ
よね？返事ちようだい？』

思い出すと急につつむいて泣きそうになる。

「返事くらいよこしなさいよお」

ここまで無視されるといつもの事ながら凹んでくる。携帯を持たせ
ても全く使う気のないあいつにはいつも苦勞させられる。一人で帰
るしかないのかと半ば諦めてトボトボと歩いていると後ろから聞き
なれた声がした。

「星奈ー！ー！」

一瞬で顔がにやけるのが自分で分かる。だけど散々待たされた怒り
もあるので下手はできない。とりあえず文句を言ってやるうとにや

ける顔を我慢して振り返った。

「おそいわよおお何何何!？」

一瞬で腕を引つ張られ二人は校門を一気に駆けていった。

「何!なんなのよ!？」

「ごめん連絡寝てて気がつかなかった。駅前でパフェ買ってあげっからとりあえず学校出よう!」

「説明になってないわよばかあ!って速い速い速い!」

「とりあえず学校出よう」

そうして二人は学校を出た。駅前でパフェを星奈に奢りながらさっきの話をするとうれい笑われた。・・・

帰りに星奈を家まで送り、星奈の父に「泊まっていきなさい」と満面の笑みで引き止められるのを全力で拒否しながら帰る途中に気がついた。最初のメールはHRが終わってすぐに来ていた。でも俺が気がついたのは二時間近く後、星奈はずっと待っていてくれた。

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです（後書き）

星奈はこんなんじゃないよ！
みたいな苦情募集中です。

感想とかも待ってます

第二話 部活？いや、この絵を見てその発想は無い（前書き）

基本この二人のやりとりがメインになりそうです。（未定）

第二話 部活？いや、この絵を見てその発想は無い

六月の暫くたった頃、いつもみたくクラスメート兼幼なじみの柏崎星奈と昼食をとっていると、急に星奈が妙な事を言い出した。

「部活に入るわよ」

皆大好き星奈ちゃんからの急な前フリ……なるほど、俺はこのボケにどうツッコミ返すか試されてるのか。

いいだろう、俺を計れるものなら計ってみろ！

「……あれ？はかれるって『計れる』『測れる』『謀れる』どれだっけ……？」

「は？知らないわよそんなの。何の話？」

「ですよー（笑）」

「で、部活に入るのをなんで俺に？」

「だから一緒に入るのよ部活に。私と同じ場所にいれるんだから光荣でしょ？感謝しなさい」

「答えになってないぞ」

ニッコリ笑う星奈の頭をアイアンクロー
（ちなみに握力は80
キロ）

「イダダダダダ（x x）ストップストップ！話すから！話すから離して！」

「話すと離すって聞いてると同じに聞こえないかい？（ギリギリギリギリ）」

「聞こえるけど今はどうでもいいわ！ああ！！ミシミシ鳴りそう！」

そんな感じでギャーギャー騒ぎながら説明を聞く、なんでも『隣人部』とか言う部活に入るらしい。「別に一人で入れよ」って言ったら涙目になってヘッドロックかまшыてきやがった。

相変わらずコイツは初めての場所に一人で行くのを怖がる奴だな……
ん？でも気になる事もある

「なんで隣人部とか言う部活なん？お前性格は残念だけど他にも色

々と部活はあるだろ？」

「……………今の会話に性格は残念って入れる必要無いんじゃない？……………あ、ちょうどいいところにポスターあったわね。これ見なさい」

星奈が指した掲示板には確かに『隣人部』と書かれたポスターがある。どうやら部員募集らしいが……………

「……………」とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだ（体）と心を健全に鍛えたびだち（旅立ち）のその日まで、共に想い募らせ励まし合い皆の信望を集める人間になるう』ねえ……………こんなもん掲げれば創部が通るなんてなあ」

「パパの学校って基本大らかだからだしね。頭にキリスト教の精神とかイエス様の教えとかそれっぽいのいれりゃ誤魔化せるわよ」

「学長の娘がスゲー事言ったな。教員のクリスチャンが聞いたら告訴状叩き付けられるぞお前」

「パパがクビにするんじゃない？」

どこの無法地帯だこの学園は

「で？隣人部の臨機応変がどうして入部になった訳？」

「はあ…まだ気が付かないの？ポスターをよく見なさいよ」

ポスターを……ああ、イラストの方が

「イラストって進○の巨○だろ？デカイ巨人が……そう！あれだ、手足の付いたのを残虐無慈悲に貪り喰うシーン」

「違うわよ！なんでそんなスプラッタなのよ！？どうみても富士山の頂上で友達同士がおにぎり食べてるだけじゃない！」

ええー、それこそないわー。

だってどうみても捕食者が餌を喰うシーンだろコレ？『部員募集中だよ』って脇に書いてるけど新しく入った奴がパシられるイメージしか湧かないし。

「それに私が言いたいのにはイラストじゃないわよ、見なさい、ここから斜めに読むのよ？」

星奈が指差すところから斜めに読むところ書いてあった。

『と』『も』『だ』『ち』『募』『集』

「どんだけ必死に友達集めるのこのポスター？」

「いいじゃない。普段から友達を求める人間だからこそ気づくメッセージ：これを見て私は確信したわ、この部活なら私は友達が作れる！」

「お前いつも囲まれてるじゃん」

うん、学校でコイツが一人とか見たことないわ。必ず男子が沢山いるし

「私が欲しいのは同性の友達だっていつも言ってるでしょ？」

「知ってますー。それで俺が何人も女子に声かけてんのに『縁は私だから気安く近付かないで』とか言ってお膳立て全部ブツ壊してんのお前だろーが」

「何人も声かけてアンタが軽い奴だと思われてるのが気に入らなかつたんだから仕方ないでしょー！」

開き直りやがったこいつ……全く、誰の為にやったのか知らないで……

「とにかく！アンタは私と一緒に部活に入るのよ、もう入部届け二人分出したし今更嫌とは言えないじゃない」

入部届けもう出したのか。しかも二人分って完全に事後承諾じゃないかよ畜生。

「なによ……一緒に部活が嫌だっていうの……」

どうやって切り返そうかと思っていたら星奈が震え出した。震えたっていつても足がプルプルしてるだけ……じゃない！？なんか今にも泣きそうな顔してるない！？

「おんなじ……ひっく……部活……でも、ぐすっ……いいじゃない……」

なんで泣いてんの！？ってああ……周りの目が段々と冷えていく……俺なんかした？むしろ被害者俺じゃ……おい、星奈ファンクラブの馬鹿共、武器を構えるな。

「わかった、わかったよ一緒に部活に入りゃいいのな？」

いつもこうゆうオチになる。最後には俺が折れなきゃならない。どうやら女子を泣かせた時点で古今東西男が悪いと決まっているみたいなんだ。この法則を作った奴をシバきたくなるな……

そんな俺の苛立ちを知ってか知らずか星奈は上目遣いで俺を見上げる。

「グズツ、一緒の部活に入ってくれる……って事でいいの？」

「いいよ、考えてみりゃ今更別々になるのが変な話だし、幾らでも一緒にいるよ！」

やけくそだね俺。やけくそで答えると星奈はすぐに泣き止んではにかむような笑顔をしている。

「幾らでも一緒に……か、ふふ」

「何？なんか言った？」

「別に、じゃあ今日の放課後に部室行くわよ」

「はいはい……」

とりあえず放課後に部室に行く事になった俺と星奈。

話がまとまった後でふと疑問に思った事がある。『隣人部』という部活を使ってまで友達を求める奴ら、そんな人間に男女で行ってどんな反応が返ってくるだろうか……？

間違いなく冷やかすと勘違いされるよな？しかも星奈は学長の娘で毎日男子の取り巻きだらけだ。もし女子がいて拒否されたらこいつかなり凹むんじゃないか？

教室に戻っていつもどおりに男子に囲まれる星奈、あいつは男子に幾ら囲まれようが気にしないが周りの女子はかなり疲れた顔をしている。まあ無理もないか、一年からずっと繰り返したもんな……とりあえず部活に行って、拒否られて一人なったらまた俺が周りに声をかければいいか。

性格は残念だがそれでも友達は作れる。『一緒にいてやる』って言ったんだ、一人にする気はない。そんな事を考えていると星奈と目があつた、なんだ？嬉しそうな目をして……？

まあ、考えても仕方ないか……とりあえず放課後、二人で隣人部とやらに行こう。

そうして俺は授業の準備（睡眠）をした。

第二話 部活?いや、この絵を見てその発想は無い(後書き)

感想お待ちしています。

第三話 隣人部……え？あの黒髪の女子はまさか……（前書き）

お久しぶりです

第三話 隣人部……え？あの黒髪の子はまさか……

放課後、俺と星奈は本当に『隣人部』の部室に来てしまった……。

「ホントに来ちゃったなあ……礼拝堂談話室4『隣人部』の部室に」

「なんで説明つばいのよ？」

「いや、来ちゃったからさ……結局何人かに聞いたが『イラストが怖い』とか『何やるのか解らなくて怖い』とかで皆全力で近寄るの拒否してたぞ？本当に入るのか？」

「未知の存在に挑戦しようという探究心が無い人間はこれだから」

やれやれといった具合に肩を落とす星奈、探究心どころか周りに友達がいらない奴が何言ってるの？とか言ってみたいけど止めよう。絶対泣くし

「まあ、あんたが聞いた人間はどうでもいいわ、きつとあのポスターに巧妙に隠されたメッセージを受け取った選ばれた人間がこの部屋にいる筈……そしてそこに颯爽と現れる私！入学、進級して一ヶ月たつても友達一人いない連中にとって神のオーダーメイドとも言える究極美の私が入部すれば連中は私と知り合えて幸せ、私は女友達が出来て幸せ。……完璧ね！！」

………たまに本当に凄いなと思うよ……一ヶ月どころか下手したら幼稚園から友達作れなかった奴がどうしてこつも前向きになれるのかなあ……？

つーかいい加減自覚しようぜオーダーメイド。お前は「優秀で」と

か「男にモテて」とかで友達が出来ないんじゃない性格がアレだから人が寄り難いんだよ。

半ば呆れて外を見ていると同じ学年の女子が何人かで帰っている。放課後に皆で何処かに寄るんだろうか？

グラウンドではジャージで走り込んでいるのは部活友達どうしだろうか？笑いなから走っているし、先輩や後輩とも仲良く見える。

そんな姿が目に入ったのか、星奈が少し羨ましそうに外を眺める。

……こいつは何年一人だったろうか？周りに人がいても満たされない日々、『友達が欲しい』そんな当たり前の願いを何年求め、周りの日常をどれだけ憧れたんだろうか……

気がつくとも星奈の頭を撫でていた。星奈は普通に受け入れている。

……特に意味もなく撫でるから慣れてるんだろうな。

満足したのか一歩前にでて扉の前に立つ星奈、扉をノックする。

扉を開けて出てきたのは男女二人。

一人は不良かヤンキーみたいな男子生徒……「ワルぶった高校生が金髪に染めるの失敗した」みたいな髪をしていて目つきが悪い。

だが俺は知っている。

モッピーだって知ってるよ。こいつは不良じゃないって、転校生だって。

転校初日に遅刻して自己紹介で皆を恐怖に叩き落としたって知っているよ？

おかげで転校して一ヶ月ろくに会話もできなくて、会う人皆に謝ら

れたり避けられたりする奴だって。

……知っていても特にすることないけどな。クラス違ったし。

そして次、こっちは大問題だ……少し前に教室で『トモちゃん』とやらと会話していた不思議少女がいやがる。

星奈はそんな俺の気持ちも知らず靈感少女の黒髪に話しかける。

「隣人部っていうのはここね？入部したいんだけど」
「違う」

黒髪は即答すると同時にドアを閉めて鍵を掛けた。

「……………」

「一瞬で閉められたな」

「なんでよ！？私が入部しにきて何あの態度！？」

こーゆう台詞が友達出来ない原因ってなんで気がつかないかなあこいつは……

まあ、門前払いの理由は何となく理解出来る、

星奈は良い意味でも悪い意味で有名だ。特に悪い意味だと『学園理事長の一人娘でいつも男子にちやほやされているお嬢様気取りのいけ好かないやつ』……嫌な話だけどこれが柏崎星奈という生徒の評価になる。

もう一度挑戦してドンドンと扉を叩いて叫ぶ星奈。すると扉が開き、黒髪は煩わしそうな表情でハッキリと叫ぶ。

「リア充は死ね！」

また思いきり閉められたな。

むしろあの清々しいまでの否定は好感すら覚えるわ。ふと気がつく
と星奈がべそかいてシャツを引っ張っていた。

「なんであんな意地悪されなきゃならないのよお……グスツ……私
が…グスツ、入部してあげるって……言って」

星奈の頭を胸に抱く。まあショックなのは理解できるけど泣く程じ
やないだろうに……

「……星奈」

「ん？ふあ（なに）よ」

「入れりゃいいの？」

「うん」

「わかった」

星奈の意志を確認して扉の前に立つ。

「ノックしてもすぐ閉められるわよ？」

「知ってる」

俺は足先に力を込める。踏み込みの力、足先から練り上げる力をそ

のまま右腕に込める。

「ちよ、それはストツ」

「疾ッ！！」

その右腕を扉に打ち込んで扉を吹き飛ばす。よし、これで閉められる事は無くなったな。室内の人間はびっくりしてるが大した問題にはならなそうだ。

「大問題よ馬鹿！」

頭を叩かれた。痛くないけど

とりあえず壊したドアを直しながら話を聞いている。

修理を手伝ってくれてる男子は『羽瀬川小鷹』

星奈の話相手の女子は『三日月夜空』

二人とも二年五組らしい。なんでも三日月夜空が……………めんどくさい、呼び方は『黒髪』でいいや
こないだ話していたのは『エア友達』というらしい。何でも友達がないのが嫌なのではなく『友達のいない寂しいやつ』と思われるのが嫌らしい。随分とややこしい基準だな……………

まあエア友達はどうでもいい。ヤンキー見たいな容姿で寂しい青春もとい誤解されやすい青春を送っている小鷹もどうでもいい、問題

は奴だ。

「あたしってほら、完璧じゃない？」

「……」

黒髪がイラツとしたのがわかった。多分小鷹も感じてる。

「頭脳明晰スポーツ万能、そして見た目通りの美少女。神がオーダーメイドとして造ったとしか思えない完璧な造形美じゃない？天の不平等を嘆く自由を与えるわ庶民ども」

「ふん、下品な乳牛のくせに」

「あら、貧乳が何か言ってるっしやるわね」

黒髪に殺意が宿る。

「……私は別に小さくない」

「中途半端な大きさの胸なんて無いのと同じじゃない？ねえ縁」

胸を寄せて持ち上げながら俺を見る星奈を見て黒髪が呟く。

「ふん、リア充共め。毎日その白髪に揉ませていたわけか」

その一言に訳のわからない対抗心を燃やした星奈はこめかみをひくつかせる。

「……自分で揉んだのよ」

「惨めだな乳牛。その体はその白髪を喜ばず効果がないようだな！」

「ええ、効果が無かったわ……毎日毎日縁を考えて揉み続けてきた努力が縁の前では無駄だったわ……」

急に凹みだした星奈に黒髪から笑みが消えた。つーか星奈は人の事を考えて何してんだコイツ

「よし、これで扉をはめて終わりだな」

「ん、ああ、おつかれさん」

扉の修理も終わったから俺も話に混ざるか……

第三話 隣人部……え？あの黒髪の女子はまさか……（後書き）

感想まっています。

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく(前書き)

珍しい連日投稿

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく

「……自分より胸の大きい女を全員殺せば相対的に私が巨乳になるな。私の崇高な計画の栄えある生け贄第一号になってもらおうか」

「やめる夜空落ち着け！」

なんか胸の話がヒートアップしてやがる。小……えーっと……金髪が止めなきゃホントにやりかねない殺意だ、部活作る辺り行動力あるから何やるかわからんなー黒髪は。

「……で、えーっと……友達が欲しいって話でいいんだよね？」

「ええ、私も縁も同じ理由よ」

「お前はいつも男に囲まれてるだろうが。いや、必ずそいつが傍にいるだろうが。しかも白髪の方は社交的な人間だろう」

「そつえば真白なんかはうちのクラスの女子も会いに行くな」

黒髪がジト目で言うと金髪も同意した。

「わかってないわね。あんなのはただの下僕。あたしが欲しいのは友達。特に同性の、例えば家庭科の調理実習や修学旅行のグループ分けの時に『好きな子同士班になって』って言われた時にすぐに一緒にになれるような友達よ」

「ほう、ならばその白髪は下僕か。気の毒にな白髪」

「違つわー！ー！」

からかう程度の嫌味なんだろうが星奈が凄い剣幕で噛みつく。

「縁は友達なんて言葉じゃ足りないわ！縁のことは私が一番よくわかってるし、私のことは縁が一番よくわかってくれる。」

「縁は一番大事な人というか……大切というか……あ、あ、あ、あ、あ、あ、愛し」

だんだんと真つ赤になって最後あたりがなんか聞き取りにくいな。

「はあ……、もういい。で、白髪は何故友達づくりなのだ？」

「ああ、縁は逆よ。こいつは友達を『つくりたい』わけじゃないしね」

「なんだそりゃ」

「今すぐ帰れ」

「聞きなさいって、こいつはほとんどが『同じ』なのよ。自分の叔父と私、それから私の家の人間はまだ区別がつくけど、それ以外は景色に写るビルや石ころとかと変わらないの。縁が人と一緒にいても、学食での食事、放課後の遊び、行事も休みも全部、どこにいても本気で人間と風景の区別がつかない人間なのよ」

「どこの人外だこいつは。西尾さんところの生徒会にでも行かしたらどうだ？」

「どこの世界に行きや良いのよ！？とにかく！そういう理由で友達とかの理屈が理解できてないから友達をつくってやりたいの」

何かと苦勞してんだな星奈は。というか仕方ないだろう。本当に理

解が出来ないのだから。でも人が建物かくらいの区別くらい解るぜ？……多分。

「えーつと真白の件は理解したけど、本人は入部する気あるのか？」

「ん、ああ、入部できるならな。星奈が『柏崎さん男子に人気あるから男子と組めば』とか『真白君と一緒にいれればいいでしょ』みたいな台詞は聞きたく無いし、修学旅行旅行を部屋まで二人きりにされて別の意味で盛り上がる周り（景色）も嫌だしな」

「私と一緒にしてそんなに不満！？」

「……まあ度を越すのはよくないよな、優秀すぎたりモテすぎたりするのは疎まれるし、興味無さすぎるのもさ……」

「ふーん、あんたヤンキーのクセにわかってるじゃない。踏んであげるからつたかひ跳あきなさい。それとも靴舐める？」

……馬鹿……また始まったな。

「なんで俺がお前に踏まれたり靴を舐めなきゃいけないんだ」

金髪がジト目で言うと星奈は不思議そうに首を傾げる。

「うちのクラスの男子はご褒美に踏んであげたり靴を舐めさせてあげるって言ったら何でも言うこと聞いてくれるわよ？……ま、まさか傲慢にもそれ以上を求めるわけ？さすがヤンキーね……。二、二、ソックスで縛ってなんであげないんだからね！変態！」

「うるさいよ」

星奈の頭を掴んでアイアンクロー。そして金髪に説明。

「悪い、でもこれで理解してくれたか？こいつに友達がないのは優秀とかモテるとかじゃない。性格がアレなんだ」

「ああ……さすが夜空の作ったポスターの真意を読み取っただけのことはある……」

「その発言は何故か私を侮辱するような意志が感じられるな」

「気のせいだ。あと真白？柏崎はそのままでもいいのか？」

金髪に言われてようやく気が付いた。星奈が俺に頭を掴まれていることを。手足がダラツとして力が入ってない……俺はそのまま手を離れた。

「……縁い」

涙目の星奈……あ、まずい、泣きそう。

星奈はソファアを虫みたくモゾモゾと動き、俺の膝に頭をのせる。よし、暫く撫でてれば機嫌が治るだろう。

「貴様らは何故違和感なくそこまで人前でイチャつけるのだ……」

黒髪がジト目でめっちゃ睨んでる……金髪まで引いた笑顔だ。

「恋人同士で入部するなら帰れ貴様ら」

「この状況みて何処が恋人に見えんよバアアカ……にへへ」

「バカップル以外に見えるか!!」

撫でられて機嫌が直った星奈と黒髪。更に口論が続くかと思っただけ、そうはならなかった。

「と、とにかく良かったじゃないか二人とも。これでどっちも普段一緒に過ごす友達が出来るわけだろ？俺も真白っていう友達が出来るし」

「はあ？」

「何を言っているのだ？」

金髪の台詞に星奈が頭を上げて黒髪と一緒に怪訝な顔をしている。

「ああ、クラス違うから調理実習とか修学旅行で一緒に過ごすのは無理か」

「「そうじゃなくて」」

「どうして私がこんなのと友達にならないといけないのだ？」

「あたしこんなのと友達になりたくないんだけど」

二人して立ち上がり睨み合う。

「……どういう意味だ乳女」

「……そっちこそどういう意味よ吊り目」

「貴様も吊り目だろっ」

「あたしの吊り目は可愛いけどあなたの吊り目はキツネみたいなものよ」

「あー痛い痛い、自分で自分を可愛いとか」

「真実を躊躇う理由がどこにあるの？」

「え、死ねば」

「ハア？人として明らかに価値の劣るあんたの方が死ぬべきじゃない？」

「金髪、二人つて知り合いか？」

「いや、夜空は喋ったことないっていつてたけど……」

「こいつの性格が悪いのが悪いのよ。凡人はパーフェクトなあたしに跪くものなのに……ストップ縁！アイアンクローは止めて！」

「頭の悪い貴様らバカップルよりマシだ」

「ハア！なんで縁混ぜてんのよあんた！つか部活で男女二人きりつてそつちがバカップルでしょうが！」

星奈の台詞が意外といい一撃だったらしい、黒髪が一瞬赤くなる。

「ば、馬鹿め！私と小鷹はそんな関係じゃではないわ！」

「はん！不純異性交遊でパパに頼んで退学にするわよ」

「パパア？いい年してパパだのママだの言ってるて恥ずかしくないのか？いつまでも乳離れ出来ない甘えんぼちゃんには困ったものだな生きていて恥ずかしくないのか？」

「ファミリー家族を大切にするのは悪い話じゃないだろ？」

「ふん、彼女が馬鹿にされて我慢できなくなつたか？」

「別に。俺が聞きたいのはお前が家族ファミリーに甘えるのを恥ずかしいといつたのを聞き返したくてさ。お前の今の台詞は、どんなに望んでも家族が手に入らない奴全てを否定するんだよな？」

「違う、この乳女が家族を盾にしようとしたのが気に入らないだけだ」

「そうか」

納得しているのか納得していないのか全くわからない瞳で夜空を見つめる縁。「景色と人の区別がつかない」といわれたその瞳が夜空だけを間違いない見つめていた。その瞳に夜空は背中に冷たい汗を流し、喧嘩をしていた星奈すら不安そうに縁の袖を掴んでいる。

「と、ところで！」

空気に耐え切れず小鷹が強引に話に割り込む。

「ふ、二人は本当に入部するのか？」

「は、入るわよ！二人分提出してるし！」

「お前も入るのか？」

表情を変えずに縁を見つめる夜空に星奈が前に出る。

「何、文句あるわけ？」

「ある。出てけ。あ、違った、死ね」

「だったらあんたが出て死になさいよ。縁に文句あんの」

「黙れ。この部は私達のだ。よって入部は私達が決める」

「待った夜空。それなら俺も場合によっては辞めるぞ」

「小鷹？」

少し驚いた表情で小鷹を見つめる夜空。

「当たり前だろ？そんな身勝手なら俺も辞めるよ。一人で気の済むまでやってくれ」

「違う、入部を認め無いとは言っていない。ただ縁の方が興味を本当に持っているかわからないだけだ」

少し考えた様子で星奈を見つめ、縁は夜空に返す。

「星奈は入れてくれ。俺は暫く仮入部でいい」

「……………希望は乳女だけだから妥当か……………。興味が無ければ辞めにかまわん」

「ああ」

「じ、じゃあ入部決まりね。そこのヤンキー」

「だからヤンキーじゃないって」

「私と縁はちゃんと名前で呼びなさい。特別に許可してあげるわ」

「縁の方はわかるけどなんで柏崎まで……」

「キツネ目だけ名前呼びとか私の優先順位が低いみたいじゃない。あと私だけ名前呼びが無いとか差別よ差別」

「わかったよ……星奈。それとよろしくな縁」

「よし。縁もそれでいいわよね」

「名前呼びは構わないけどさ、一つ聞いていいか？」

「何？」

不思議そうに首を傾げる縁に星奈は笑いかける。

「なんで俺は金髪と仲良くなるのが決定してんの？」

「「「え？」「」」

「名前で呼ぶのはわかった。でも別に部活以外で仲良くする必要なくね？」

「……小鷹……乳女も言っていたらう、アイツは区別がつかない人間だ」

「……悪気はないやつだから。普通に明日から話かけてくれるわよ……多分ね……」

心底「わからない」という表情の縁を見て、今日一番ダメージが大
きいのは小鷹だったのは言っまでもない。

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく（後書き）

夜空も小鷹も悪くない（笑）

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ（前書き）

まさかの連日投稿（笑）ISもこれくらい出来ればいいのにな……
…（泣）

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ

「お疲れさまでした」

『お疲れー』

夜、俺はバイトが終わって帰宅する。明日から土日で学校は休み。しかもバイトも入ってない……先に言っておくが叔父の仕送りのおかげで生活に不自由はない。

バイトは趣味だ。……いや、働くのに責任は持つてるよ？派遣タイプで派遣先は病院の地下だったり港の倉庫だったり森の中だったりで色々な場所があって割りと楽しいバイトだ。

……仕事内容？契約書の都合で内容は口外出来ない……スマン。

家に帰ると電気がついていて、鍵も開いていた。

「おかえりー縁ー」

「……いらっしやい星奈……」

家には「くつろぎすぎじゃね？」とか文句言いたくなる状態の星奈がゴロゴロとしていた。部屋着代わりだろうか人のジャージの上だけ着ていやがる。……下？健康的な脚線美が伸びて薄ピンクの逆三角とぶるぶるとした桃がジャージからチラチラしてるとだけ言っておく。

まあ、それはともかく、たまに星奈はうちに来る。そんな時はとりあえず星奈の家に連絡をいれる。

「あ、柏崎さんちですか？真白ですけど……」（略）

「略）はい、星奈うちにいます。バッグ持って泊まる気みたいで……え？（略）」

「略）……いや、迎えに来て貰えれば……はい……はい……いや、結婚とかじゃなくて（略）」

「……わかりました。じゃあ明日そちらに送りますんで……はい……はい、失礼します（終）」

「パパには許可貰ってあるわよ？」

「……うん。『娘を頼む』と『お義父さんだろう？』ってのが何処まで本気かわからないから返事にいつも困るわ……」

「大丈夫よ、酔った勢いで話してるから」

「いや、叔父さんが……気にしないな。絶対お前のお父さんハイになるに決まってる……」

「ノリいいものねー。あ、コンビニで色々買ったから食べましょ」

「うん」

とりあえず星奈と食事をする事にした。

「で、何しに来たの？」

パスタを食べながら星奈に聞く。うん、やっぱりファミマ（ファミンタステイック・マーケットシェア）のパスタは美味しいね。

「ゲームをしに来たのよ」

「ゲーム？」

「そ、ゲーム」

もぐもぐもぐもぐ……「くくん。」

「……星奈、そろそろ遅いから帰った方がいいんじゃないか？」

「え！？土日泊まる為の用意してるんだけど!？」

俺は頭痛のする頭を押さえて溜め息を零す。

「バカらしくなってんだよ。なんで今からゲーム？仕事上がりで疲れてんだけど……」

「今日部活でゲームの話が出て一緒にやることになったのよ。とゆうかあんたも来なさいよ部活」

「……バイトだったんだ」

ジト目の星奈をあしらって棚を漁る。つっても棚の中は目覚ましとかアクセ系の小物だけだな。……あ、例外で携帯ゲーム機が……

「それよ縁!」

俺が手に取ったゲーム機『PSP』プレイングステイツポータブル 職場や学校で進められて買った商品。まあ暫くしたら冷めてホコリを被ってる程だ

「あるけどソフト一つしかないぞ? 『モン狩』しか」

「最高よ縁! あ、あ、あ、愛し……………てる」

「赤くなる前に最後まで喋れ、聞き取りにくい」

「……………ごめんごめん。まあとりあえず、月曜日にこれをやるのよ部活で」

あれ? 星奈の額に青筋が見える。

「隣人部で? 夜空や小鷹と?」

なんでまたそんな事を……………おい、今度は星奈がなんでか涙を流してる

「あ、ごめん昨日一日かけてあの二人の名前を覚えさせたのが無駄にならなくて良かったなあって思って」

……………返す言葉もありません。結局昨日は何故か最終的に凹んだ小鷹女子二人が慰めてやってたからな!。あいつ何があっただらうか……………

いや、女子に優しくされた時点で過程はどつでもいいか。

「そついやお前それどうしたの? PSP持ってたっけ?」

涙を拭って平然とした声で答える

「今日貰ったのよ。適当な奴に欲しいって言ったらくれたわ」

当然のように言えるコイツに若干イラツとしたのでバックドロップ
鈍い音と共に星奈は落ちた。とりあえず片付けをして、星奈が沈ん
だうちに寝よう。ゲームを今からとか冗談じゃない。

俺は早々に片付けて寝た。……………星奈に毛布をかけて歯を磨いてや
ってからな。

土曜日……

「じゃ、始めるわよ縁」

「おう」

本当にゲームをやるはめになった。

ちなみに今日の星奈は俺の制服のワイシャツを着ています、俺のだ
から袖がぶかぶかでも前ボタンが三、四個開いてる。

……………自分の服着ろよ

「昨日縁が帰ってくるまで暫くやってたのよ。流行ってるだけあつ
て割りとよく出来てたわ。まあ、所詮はお子様の遊びだけどね」

「ふーん。ホストお前でいいだろ」

「え、うん……」

かまって貰えなくてつまんなそうだが知った事か、星奈はランク1で俺はランク5。ちなみに5が最高ランクな

ゲームを繋ぎスタート地点に二人で立つ。このゲームはキャラの性別から顔、体格、髪型、etc色々弄れる。まさに都合のいいキャラクターが出来上がるのだ。

「星奈……お前のキャラ……【縁】って……」

……俺じゃね？てつきり【星奈】って名前で全部自分にそっくりにすると思っただのに……

「そんなに俺がモンスターに吹っ飛ばされるの見たかったのか？」

「違うわよ！？てゆうかあんたの【AAAAA】って何！？どんだけ適当に名前つけたのよ……」

「気にすんな。名前なんて意味をもたんよ」

「~~~~っ、まあいいわ……さ、行くわよ!」

星奈の武装はまんま初心者で薄っぺらい。そして俺はやたらドス黒く、刺々しい攻撃的な鎧だ。

「仮面被っててやたら敵ついわね。武器は？」

「鈍器だ。ちなみにこの鎧は攻撃的な姿の癖に回避性能ばっかり特化してるぞ」

「ふーん。あ、武器のハンマー見せなさいよ縁」

「ん？ああいよいよ、ほれ」

俺は自分の武器を構える。

【AAAAA】

武器：ハンマー 『村長』

皆大好き村の村長。彼がその身を削り命をかけて繰り出す一撃はどんな災厄も恐れることはない。

「……………縁？」

星奈が凄い妙な表情で俺を見ってくる。なんだろう、前に回転寿司で自分の頼んだものがいつまでも来なかった時の星奈によく似ている。

「どうした？」

「聞いていいかしら……………」

ああそうか、まだやり始めて解らない事だらけだもんな。普通はそこから思考錯誤を繰り返していくんだが……………まあ、星奈はゲーム自体が初心者だし、多少は調べながらやってやるか。

隣人部でやるまでに星奈が自慢出来るくらいは進めてやらないとな。

「なんならパソコンでボスキャラとかマップ調べるか？」

「じゃなくて！！そうじゃなくて！なんで武器が村長！？その人あれよね？クエストをくれる村の村長さんよね！？」

星奈がちよつと涙目で訴えてくる。

「ああ、お前もよく知ってる村長さんだ」

「なんで武器扱いなのよ！？」

「俺も詳しくは知らないんだが製作者の趣味みたいなもんらしくてな、人道的な面で武器のデータを潰したらしい。だが製作者が隙を見て一部を修復し、全てのクエストをクリアしてスタッフロールを見て、全てのクエストを決まった装備、決まった時間内にクリアすると使えるようになるらしい」

「どんだけお年寄りを痛めつけてるのよ。モン狩にそんな裏話があるなんて知りたくなかったわ……」

星奈が顔を青くする

「でも製作者はおじいちゃん子で今でも孝行者らしいぜ？」

「ならこんなデータつくんなー！！」

星奈がゲームにツッコミを入れた。やだ、傍目から見ると痛い女の子にしか見えないじゃない。

「とりあえずモンスターが来たから行くぞー」

そういうと俺達の目の前にそこそこデカイ熊みたいなモンスターが

現れた。俺は村長を構えて戦闘態勢に入る。

「し、仕方ないわね……」

星奈も大剣を構えた。

「いくぞ」

俺は熊の攻撃をローリングで避けて真横に移動する。そのまま溜め攻撃に構えて村長が赤く光る。

【キタキタキタキタアアアア！！！！！】

「ちよつ、村長大丈夫なの！」

「大丈夫だ問題ない」

一瞬で最高潮まで溜まる村長のテンションを一気に熊へ叩き衝ける。

グッシヤアア！！

【グハアア！！】

「イヤアアアア！?!?!?」

村長が熊を叩くと同時にハンマーなどの打撃系からは出る筈のない血のエフェクトが出て村長の叫びが響いた。

ついでに星奈もビツクリしてゲームを落としてた。

「ちよつと村長大丈夫なの?!?!あきらかにおかしい音したわよ?!」

大丈夫だ、問題ない。
そして星奈がビククリしてるとこ悪いが熊は倒れる。流石裏設定武器、威力が半端じゃないな(笑)

「私初プレイがゲームにツッコミ入れて村長にビククリして本体落としただけなんだけど……」

「気にすんなよ、初めは皆こんなもんだって」

「気にするわよ。ねえ縁…もう一個データ作って一緒に進めましょ
うよ?」

ええー超めんどくさい……

「縁い……」

ああ…くつつくな……ワイシャツ脱げるぞ……あ!ゲームを捕ろうとするな、このデータ作るのにどれだけバイト先でやったと思ってるんだ。

「……グスツ…縁い、一緒に進めましょよお……」

とれないように離していると星奈が涙目になってきた。いい加減この打たれ弱いのかしよぜ星奈。いや、すぐ涙目になるからって甘やかす俺が悪いのか、星奈が悪い訳じゃないな。よし、ここは星奈の為に無視だ無視

「……………(プイッ)」

「グスッ……………」

「……………（っーん）」

「……………（ふるふる）」

「……………（ピクピク）」

「……………（ぼろぼろ）」

「！？だあっ！わかったよ！好きに設定していいから自分でキャラ作れ！！」

無視して黙ってたらなーんか妙な擬音が聞こえてきて、仕方無しに振り向くと泣き出しやがった！

普通に考えて女の子泣かした時点で男の負けだよ畜生！！

「ふふっ、ありがと縁」

星奈は上機嫌でPSPを持ってキャラを新しく作り出す。

自分の定位置ですとでもいわんばかりに当たり前に当たり前に人の膝に座る星奈。いや、正確には横向きで体をよっ掛かけて体育座りをする……………

……………まあ、俺が別に苦しい訳じゃないから星奈がどんな態勢でもいいけどさ。

……………30分後、星奈が作ったキャラは女キャラで名前は【星奈】予想通り星奈まんまなキャラだ。

星奈が【縁】で俺が【星奈】夜空にどんだけ怒られるか今から若干気が思いな……………

とりあえず二人で土日を使って本当にゲーム三昧だった。
食事は結局全部俺が作って星奈は食べるだけ。
たまにレンタル行つてDVD借りたり、二人で床でゴロゴロしたり
してかなり墮落した休みだったな……

P . S .

家まで送ると星奈の父親にまた引き止められた。ワイン一杯飲んだ
だけで酔うのに酒を進めるのは如何なものだろうか？しかも俺未成
年の筈なのに

結局また酔つて『星奈を任せた』だの『娘をよろしく頼む』だの始
まって帰ると言うといい年した男が鼻水垂らして止めるんだ……
痛々しいから制服だけ持って来て結局日曜は星奈の家泊まる事にな
った。

月曜日

学校に行くとき夜空に部活の無断欠席で怒られた。今日は必ず来いと
行っていたから授業終わって覚えてたら行こう……

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ（後書き）

せめて部活でゲームをやらせよ。………という叫びが聞こえた気がする。

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい（前書き）

仕事が前に立ちはだかる……

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい

「リア充は死ねえ!!」

「うっさいキツ根暗！」

「黙れバカツプル！」

「神に逆らった事を後悔させてやるわ」

「うっさい肉!!」

PSPをプレイしながら罵り合う（見た目だけ）美少女二人、そんな二人を尻目に白金の俺達は地道にプレイをしていた。

「んでここから横に入るとショートカットになるわけよ。で、ショートカットの途中に採掘できるポイントがあるわけな」

「へえー……お、レア鉱石ゲット」

「まだまだレアじゃないって」

「うっさいな、俺にはレアなんだよ」

「あ、夜空がやられたな」

「星奈二回、夜空一回で合計で………18対16か………」

「大分慣れて差が縮まったな」

普通にゲームをするはずが何故か二人の一騎打ちになったモン狩…
…なんでこうなったのか？それをまず説明しなきゃいけない。

……………そうだろ？

月曜日。全員が部室にゲームを持ってやってきた。

「操作とかは予習してあるな？」

「ああ」

夜空の問いに小鷹が答える。

「休みの間二人でやったけどたいしたことないわね。所詮お子様のお遊びってとこね」

素直じゃないことを言いやがる……………

全員で星奈を無視して互いにPSPを起動させた。

「ちよっ！？せめて縁くらいは反応してよ！」

「……………ホスト誰にする？」

「ランク一番高い奴でいいんじゃないか？」

俺が言つと小鷹も夜空も「そうだな」と同意する。

「小鷹と縁のランクは？」

「俺はまだ1」

「俺は前からやってるから5だな」

「ふっ、私は3だ」

夜空が一人で得意そうに言った。しかし一人で3とか凄いなこいつ。普通それいくまでに飽きると思うんだが……

「ちよつと！私にも聞きなさいよ！」

星奈が夜空に言つと、これでもかと言つほどに面倒臭さそうな顔で仕方無しに聞きいていた。

「ちっ……ちっ牛のランクはなんだ……牛肉のA5とか言つなよ」

星奈の名前はいつの間にか牛女や乳女ですらない牛になり一人だけランクが牛肉になっていた。あだ名が既に悪口の類とか凄いな……

「ふん！そんな事を言つていられるのも今のうちよ！見なさい！私のランクを！」

そついつて掲げたPSPに写る星奈のランクは……

『5』

「5!?!」

「あたしにかかればこんなゲームなんてちよろいものよ。ゲームまで天才的だなんてあたしってどこまで完璧なのかしら」

そう言っつて自分の凄さを誇示した星奈になぜか虐めたい衝動が生まれ、俺は簡単にネタばらしをする。

「流石だな星奈。凄いぞ」

「ま、まあね……えへへ」

星奈の頭を撫でてPSPを持つ手を軽く握る。少し嬉しそうに体を預ける星奈からPSPを奪い夜空に投げる。

「あ！？ちよつ、縁！」

「よし、いいぞ縁。プレイ時間を見せてもらっぞ肉」

「あ、勝手に見んな！」

俺から離れようとする星奈の頭を撫でて少し悲しい声を出す。

「そっか……星奈は俺から離れちゃうんだな………」（笑）

「えっ！？そ、そそそんな訳ないじゃない！」

（笑）に気がつかず頬を染めて、恥ずかしそうにくつつく星奈の目のメイクを落とす。

「プレイ時間41時間だと！？しかもなんか知らないアイテムいっぱい持ってるし！装備も可愛いし！肉のくせに生意気だ！」

星奈のPSPを投げつける。

「何すんのお馬鹿あ！……あ！？縁私のメイク落としたでしょ！馬鹿！」

どうにかキャッチした星奈は液晶でようやく目元に気がついたらしい。

俺が寝てからもチマチマとプレイをしていたこのアホはパンダみたいなクマが出来ていた。

「見ての通りこいつはずっとこれをやってた訳だ。俺に（・・）泣き（・・）ついてな（・・）（・・）」

床に伏せる星奈を見つめて蔑むような瞳で見つめながら膝を組んで答える。

「あたしにいくかかれば、こんなあゲームなんてえ、ちよろい。ゲームまで天才的だなんて、あたしって完璧だモォー」……ねえ……」

「いつあたしがそんな話し方をしたかしら!？」

「まあ、たかがゲームにここまでやる奴はいないがな」

「くっ……縁まで……とにかく！あたしがホストって事で文句ないわね！肩慣らしでランク3受けとくから準備しなさい！」

「ふん、たかがゲームに夢中になるお子様に合わせてやる」

ちくちくと嫌味を言いながら操作する夜空。すると会話に混ざれなかった小鷹が近寄って来る。

「もしかして休みの間ずっと付き合ってたのか？」

「『付き合わされた』だな」

「でも優しいな縁は。それに星奈もなんだかんだ言っても部活動に取り組んでくれるんだから微笑ましいよ。……………ぶっ続けは自重した方がいいと思うけど」

……………意外だ……………すっごい意外だ。あの痛々しい行動を微笑ましいとかどんだけこいつは心が広いんだ？

……………まあ、星奈をちゃんと評価してくれてるのは感謝しておこう。

「……………そうだな」

俺は色々な意味を込めて同意した。

スタート地点に立つとそれぞれのキャラが立っていた。

「小鷹、それだけ正確なイメージが持てるんだから希望を捨てちゃダメだ。まずは顔の骨格から変えることを始めよう」

「初めから「無理だから諦めろ」って言われてる気がしてしょうがねえよ！いいだろゲームなんだから夢見たって！！」

「夢だと認めたな小鷹」

「名前の【ホーク】って鷹？少しは捻りなさいよ」

小鷹のキャラクターは金髪サラサラヘアに美青年な感じだった。

「そ、それなら夜空はどうなんだ！？なんだそのニコニコ顔！お前そんなふうになりたいのか！？【NIGHT】でニコニコとかギャップ酷すぎだろ！」

「なんだと！この黄土色ヤンキーの分際で私のキャラにケチつける
きか！」

「先に人のキャラにケチつけたのは夜空だろうが！？」

「お前のは現実と妄想が掛け離れ過ぎているんだよ！！」

「お前にだけは言われたくない！」

夜空は容姿は大体一緒なんだが表情だけは本人と別人でやたらとニコニコしていた。

「まあお互いに痛すぎるわよ。縁もそう思わない？」

げらげら笑ってる星奈を見ながら俺は少し考えた。この二人は何故か星奈を見ようとしらない……

「まあ私のキャラが一番マシって事ね」

得意げに誇る星奈……おかしい、いつもなら絶対夜空が噛み付くのに……！？

「……言いたい事があるなら二人とも言っていないんだぞ？」

俺は二人に発言を促した。星奈は気がつかずに笑う……

「縁、きつと私達ランク5に恐れをなしているのよ。ふふん、私達二人を崇めなさい雑種ども」

どこかの英雄王みたいな発言に夜空が返す。

「ああ、否定しない。恐れてはいるさ……」

「ああ、俺もだ……」

「ふん、でしょうね」

得意げに語る星奈をよそに夜空どころか小鷹すらヒクつく

「最初は何かの間違いかと思った……だが間違いじゃなかった！肉！！貴様のキャラの【縁】とは奴だよな！？貴様の隣にいる奴だよな！？いくら私でもそこまでやれば引くぞ！！」

ああ、やっぱりドン引きするよな。

「お、俺も無いと思う……縁？多分訴えたらお前勝てるぞ？どうする……」

「許せ縁、私はてつきりイチャイチャとしているウザったいバカッブルだとばかり思っていたが、お前は完全な被害者だったんだな……」

どうやら二人は本気で心配しているらしい……いや、好きにやらせた俺も悪いけどさ、二人とも星奈を重度のストーカー扱いは止めてやってくれ……

「なんでキャラを縁にただけでドン引きされてんのよあたし!? 縁だって【星奈】って名前にして私みたいなキャラ作ってくれたわよ!?!」

「貴様が強要したんだろうが!隣人部で人権についてディスカッションしてやるうか肉!?!」

「なんでよおー!?!?!?!」

さすがにキャラ作りはやり過ぎらしい。二人にそういうモラルがあったのがビックリしたが、一番ビックリしたのは開始して10分たつのにスタート地点から一歩も動けない俺達自身にビックリした。

………わかってはいたが、このメンバーでゲームとか絶対に無理だな。

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい（後書き）

次回……狩りが始まる……！！

第七話 ゲーム【後半】やっぱり無理だった（前書き）

ゲーム編その1終了

……そうだよ、俺もそれは反省してるよちくしょう。だが言い分もあるぞ

「仕方ないだろう、これが普通だと思っていたんだから」

「……………」

あ、黙った。

「よし次は私がホストだ」

「ああ、夜空は部長だから当然だよな」

二人してコミュニケーションをシャットダウンしやがった！いいのか！？隣人的にそれっていいのか！？

「肉、いつまでもやってないで入れ」

「ぐえっ!?!」

のの字を書く星奈の襟首を掴んで引っ張る夜空。星奈、その声は女の子としてどうよ……?そんな風に考えていると星奈は気を取り直してゲームを再起動する。

「くっ……私が普通よりズレてるのは認めるわ！けどこのキャラクターが強いのも事実！私の……いえ、私達の土日の努力に跪きなさい！」

……認めちゃったよズレてるって……あと土日の努力って俺巻き込まれただけだからな!?!

決して口に出せない愚痴を胸に俺は集会所へ集まった。さあ、狩りの時間だ……

「村長は変えてこい」

……村長が何をしたっていうんだ……
俺は渋々武器を普通のに変えた。

そして冒頭に戻るわけだ。

きっかけは星奈が夜空を大剣で斬っただけ。……うん、初心者にはよくあるよくある。むしろ自分の攻撃が味方にも与えるという設定を作った製作者……オボエテロヨ

「さあ死ね！人を殺している時だけ生きていると実感出来る！！」

夜空が人としてアウトな事を言いながら星奈にボウガンを撃ち込む。

「……っーかニコニコ顔でボウガン撃つとか怖くね？」

「夜空だとあんまり違和感ないからなんとも言えないな……なんていうか……あの心底幸せそうな笑顔が人を撃つ喜びだと思つと……うん、ちょっといたたまれないな……」

小鷹と雑魚を倒しながらマップを進んでいく。会話の端々に哀愁が漂う……

「割り切れ小鷹。殺らなきゃ殺られるんだよ」

「倒すのはモンスターだろ……ああ、また画面の死角に罠を……」

夜空は徹底して人を倒す技術を駆使している。こいつにバトルロイヤルゲームのスマブレ（スマイルブレイカーズ）をやらしちゃダメだな。

「畜生風情が神に逆らった事を後悔しながら死になさい！」

星奈は星奈で随分とアンタッチャブルなセリフを言っていやがる……土日に必死に集めたレアアイテムを贅沢に使った圧倒的な物量による敵の駆逐……星奈、お前モンスター狩るときより動きがずっと良くなってるぞ。

そんな感じでプレイが続き、星奈は自分のレアアイテムを使い切るまで戦い、夜空は金が無くなるまで戦った。なんて泥沼みたいな戦場だろうか、どこの内戦だよ。

ちなみに小鷹はこいつらが戦っている間ずっと素材を集めて装備が大分変わった……よかったな小鷹。

「ふん、ゲームをやってみたがやはりダメだな。何故ゲームの中ま
で他人に気を使わねばならんのだ」

「全くよ、ゲームくらい好きにやらせて欲しいわ」

「お前らがいつ他人に気を使ったよ」

「「あゝあゝ？」」

小鷹の小さなツツコミにすら反応する狩人。俺は確信したね、こい
つらはハンターじゃない。『アラガミ』とか『使徒』の類だよ。

部室でのゲームは散々だったがゲーム自体は中々の面白さなので小
鷹は暇な時にちよくちよくやってるらしい。俺？俺は星奈が飽きた
らしいからまたやらなくなった。

何度か誘われたが基本持つてないのが普通だから忘れてる毎日。だ
んだんと凹む小鷹をどうにかすると部長命令があったので、仕方な
く小鷹のクラスでモン狩をしている奴を見つけてやった。

勇気を出して一緒にプレイしに行き、休み時間と放課後にクラスメ
イトとモン狩をプレイ出来た小鷹を見て、まあ大丈夫だろうとバイ
トに行った。

………後日、『羽谷川小鷹が教室で白昼堂々とカツアゲをした』と噂が流れた。

一体どんな流れでそうなったか知らんが、流石に夜空も何も言えなかつたらしい。

「やっぱり携帯ゲームはリアルの人間とのコミュニケーションが必要だから上手いかなかったのよ」

帰りに星奈の話を半分くらい聞きながら帰る。

適度に適度にある程度話に返事をすれば満足するので会話に付き合っている、ゲームショップの前で星奈が止まった。

「………何してんの」

見ると星奈の瞳は驚愕とか感動とかでキラキラしている。

「………これよ」

「………は？」

「そうよ！同性の友達を作るのになんで剣を振り回さなきゃならな

いのよ！そうよ、私に必要なのはこんなゲームなのよ！！」

星奈が興奮気味に語りながら指を指す商品を見て、俺は軽い目眩と頭痛がした。

「まあジャンルの縁には不必要かもね、私がいるし」

それは大した問題じゃないだろ……

「よし、まずはクラスの下僕から一式手に入れて部活で使うわよ」

ああ、もう手に負えないな、まあ星奈が何してようが手伝うけど。

どんなジャンルかはちよつと考えたくないから……いや、幼なじみがこのゲームをやるとかちよつと自分で割り切りたいから話したくない……グスン

第七話 ゲーム【後半】やっぱ無理だった（後書き）

次回もよろしくお願いします

第八話 別に甘やかしてないし俺だっけキレます(前書き)

読んでくれている皆様お久しぶりです。

遅れてすいませんでしたー!!orz

第八話 別に甘やかしてないし俺だってキレます

放課後、星奈がまたクラスメイトからゲーム機を受け取っていた。

男子が土下座して星奈が受け取りながら男子の頭を踏み付ける光景
……………うん、見慣れた。

どうやら今日はこないだ見つけたゲームを実際に部活でやるらしい。

俺はバイトがあるから星奈が男子を踏んでる間に教室を出る。

下駄箱で夜空で出会った。

「今日は部活に不参加か」

「そ、バイト」

「なら肉はどうする」

「あいつは普通に部活行くよ?」

淡々と会話していると声がかげられた。部活参加の女子や男子が声をかけていく。俺も軽く挨拶をする。

「縁」

急に夜空が声をかけてきた

「何？」

「お前、今話した奴らに何人知り合いがいる？」

「よくわからない質問だな……まあ答えるか」

「一人もいないけど？夜空は知り合いいたの？」

「……いや、私もない。じゃあ私は部屋に行く、お前もなるべく顔を出せ。肉の世話はお前の仕事だ」

「ははっ、星奈は気難しいからな。でも悪い奴じゃないよ」

俺は軽く手を振りながらバイトへ向かった。

「一人もいない……か、その割にはあいつら親しそうだったぞ……」

真反対に歩いていたら夜空が言った言葉は聞こえていないし、その言葉がどんな意味かも俺は知らない。

夕方、バイトが終わった帰りに家の前で膝を丸めて座り込む星奈を見つけた。

「……………何してんの？」

「……………」

目元が真っ赤に泣き腫らしている星奈。

「もう一回だけ聞けど……何してんの？」

星奈は急にぼろぼろと泣き出した。

「う、うう……うええ……」

「今日放課後に部室に行つてゲームをやつた……ああ、こないだパソコンで調べたやつね」

「うえ〜〜、うううえ〜」

「部室で夜空と小鷹と一緒にゲームをプレイしたら……」

「ひっく……ひっく……ぐずっ」

「有紀子^{ゆきこ}は私を信じてくれなかった……有紀子^{ゆきこ}って誰だよ!？」

「うええ〜……」

「『信じてたのに』……つてお前まさかゲームのキャラクターに言つてんの!？」

「有紀子は私の親友よー!！」

「戻つてこーい!お前ショックでゲームと現実の狭間に挟まってるぞー!！」

感受性が高いといつか……なんといつか……

やっぱり基本アホだなコイツは、あと性格が残念だ。

のめりこみすぎだろ！？

とりあえず近所迷惑なので家に入れた。

「という訳で私と有紀子の学園生活を邪魔したあかりってビッチが元凶なのよ！！」

「主語話せや！学校で何やったのか肝心な所省き過ぎてて理解し辛いんだよ！！」

ただでさえゲームやった以外に情報ないつつうのに俺にこれ以上何をやれというんだ。

あ、ちなみにゲームの名前は『ときめいてメモリーデイズ7』大人気美少女恋愛シミュレーションゲーム『ときメモ』の最新作……らしい。………どういうゲーム？

女の子と仲良くなる事を目的としたゲームで『ギャルゲー』と呼ばれます。

「で、部活でこのゲームをやるうとしたのよ」

「知ってる、ゲームのセーブデータに名前残ってるし、つーか何『真白せもほやかたま』って……………嫌がらせ？」

「ち、違っわよ！これはあの馬鹿キツネが……………」

うるたえる星奈……………というか絶対これ『真白星奈』とか入れようとしてないか？

「と、とりあえずもう一度名前から始めるわ」

「いいよ面倒臭いから、このデータでやっちなえ」

また最初から始めようとする星奈を無視してストーリーを始める俺

「わかったわよ……………名前『星奈』にしようとしたのに……………」

少し頬を膨らませている星奈を横目にゲームを進める俺達、『真白せもほやかたま』は自分をどこにでもいる『普通』と言い張り平凡な人生と言い切る。するとチャライ感じの男が現れた。……………そして

「死ねやチャライ男オオオ！！」

瞬間、俺は躊躇わずテレビの中心……………そう、出てきたチャライ男の顔を踏み抜くように蹴りを放つ、おかげでテレビの中心は俺の足が貫通している。

……俺ゲームに出るようなお助けキャラみたいなモブって嫌いなんだ。いや、お助けキャラや説明キャラは嫌いじゃ無いが……あれだ、街中でナンパしてる集団やチャラいの見つけると人間テトリスやりたくなるんだ。そんな俺に星奈はびっくりして反論する。

「何してんの！？何してくれてるの?! テレビが壊れ……てる……け……ど……なんで……?、なんで蹴った部分がガラス砕けずに熔けてるの……!?!」

星奈の言うとおり、テレビのガラス画面が貫通している。そして画面が蹴りの摩擦で焦げて蹴った周りのガラスが若干熔けていた。

「全力だったからな、やりすぎた。摩擦でこうなったんだろ」

俺は布を取り出してテレビに被せる。

「なあ、なんか杖っぽいのない?」

「……シャ、シャーペン……とか?」

「おう、んじゃあ1・2・3」

うるたえている星奈からシャーペンを受け取ってテレビを軽く叩く。
すると

何事もなかったかのようにテレビが元に戻った。

星奈にそれだけ言って俺はゲームを進めようとしたが、星奈に首を絞められた。

「なんでコイツなのよ！」

あ、下乳に挟まれて軟らかな感触が頭の上に……じゃなくて

「星奈よく考えるんだ、『将を射る為にはまず馬を射よ』まず外堀を埋める事が大切だ」

好きなキャラメインにするのが普通なんだからこのやり方は間違いだけだな。

「な、なるほど……さすが縁ね！馬鹿キツネや下っ端ヤンキーとは格が違うわ！」

……ああ、夜空と小鷹か。

別に好きなキツネを攻略させてやってもいいんだが、コイツは間違いないく全キャラを攻略する。その確信が持てる。

何故なら……

「ひつく……ぐずつ……あかり……なんで貴女はそんなに優しくなれるのよ……」

あかり

【私も……よくわからないや……けど、きっとせもほやかたま君のおかげよ？私、貴女がいてくれるから優しくいられる。……貴方が……大好きな貴方が誰よりも優しいから！】

「あかりー！！！」

単純なんだもんコイツ……

さっきまで治安国家に住む住人とは思えない発言をしながら進めていたのに今ではゾツコンの星奈、コイツは本当に単純だからいくらでもめり込む。

そしてしばらくしてから星奈は藤林あかりをHAPPY ENDで終えた。今は別のキャラをやっている。

俺も暫くは見ていたが諦めて寝た。

後日、廊下でギャルゲーを持っている小鷹に会った。廊下でギャルゲーをもつヤンキー面ってなんかシニールだね。

「あ、縁」

「やつれてるなあ小鷹、星奈に押し付けられたか？」

「ああ……お前は？」

「俺はいつものように付き合ったよ」

「最後まで付き合えるお前が凄いよ……とりあえず俺も一回やってみるわ」

あまり気乗りしないようだが帰っていく小鷹、また聞いてみるとどうやらチャラ男でBAD ENDをしたらしいがあいつは「親友との変わらない友情を誓うエンディングなんて最高じゃないか！」とか力説したから俺は返ってきたゲームを叩き割って終わった。

第八話 別に甘やかしてないし俺だってキレます(後書き)

次はいつになるかなあ……

アニメを楽しみながらやりたいです

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ（前書き）

仕事していると一日って凄い早いですよね（笑）

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ

「なんか最近、誰かに見られてる気がするんだよな……」

『ふん、外面がいいだけのビッチには用はないのよ。てめーはそのへんの頭悪いチャラ男とでも乳繰りあつてるバアアアカ！』

『『ときメモ』は全ての国民がプレイすべき作品だわ！これはただのゲームなんかじゃなくて……言うなればそう……人生、かしらね……』

「まあ……こういう具合に貴様がない場所でこの肉は残念な感性を遺憾なく発揮しているわけだ。見るこの完全に相手を蔑む瞳を、そしてゲームで人生を捨てた双眸を」

夜空が聞かせてくれた声は星奈によく似ていた。しかしゲームに人生を投げ打つとは随分と潔い生き方じゃないか。

「何であんた録音してんのよ！消しなさいよ！ていうか消して！……縁！せめて聞いて！聞いて欲しくないけどこつも興味なさ気だとあたしも立つ背が無いから！」

訂正、どうやら星奈だったらしい『ときメモ』を人生と語るとは星奈、お前にとって学園生活はどれだけ重いんですか？

「何をいつているのだ肉、貴様に立つものがあつたのか？」

「何で曝しものにされた上にこき下ろされてるの私！？」

星奈だからさ……何だこの赤い誰かを彷彿とさせる台詞は……!?」
星奈だからさ……」 一体何処を変えれば俺は……俺は……!

……まあどうでもいいか。

『なんで!?なんでテレビが戻ってるの!?なんで何事もない顔してるの!?てゆうかまずテレビ画面が摩擦で熔ける蹴りって一体何!?なんで一瞬でテレビ戻せたの!?』

「はい、じゃあ上のを参考にしてくれ、この一文だけで『なんで』と言う台詞を星奈は4回も言っている、これは聞く側としてもよろしくない、シンプルなツッコミならともかく『なんで』と繰り返す事で逆に他の奴がツッコミづらい場面を作ってしまったという訳だ」

「肉め、貴様そこまでして目立ちたいか……」

「これこの間のあたしの会話じゃないのよ!どう見ても私けなされてるだけじゃない!」

とりあえず俺も試しに星奈にダメ出しやっぱり友達作りなら会話の仕方を見直すのも重用なものな。

「星奈の場合はこれを無意識にやってしまったから問題なんだ、これを具体的に1から10の項目に分けて『なんで』という単語を星奈が使う状況から逆説で説明していくとだな」

「縁ー!私が悪いの!?私が悪いのこの状況!?私が悪いなら謝るからやめてえー!」

更に続く考察を涙目で抗議する星奈。

「まず人の話を聞いてくれえ!!」

だがそこに切り裂くような叫びと共に小鷹が会話を遮った。人の話を聞けって言われてもいつ話したよ小鷹くん……？

「出だしから！初っ端から！一番最初から俺話したよな！？何で誰も聞いてくれなかつたんだよ！」

「自惚れるんじゃないわよ小鷹、被害妄想なら隣の懺悔室行ってきなさい」

「どんだけ辛辣な判断下されてるんだよ俺！」

「はいここ注目ー、『なんで』と繰り返す事なく『どんだけ』と一言で切り捨てたー！」

「まあ、待て縁、話を聞いてやるっ」

夜空が優しく小鷹の主張を聞こうとしている。

「夜空……!!」

だが小鷹は涙目になっている。それは何故か？……簡単だ、夜空が俺達以上になにか可哀相なものでも見るような慈しみに満ちた眼差しを向けているからだ。これはキツイ

「ほ、本当なんだ夜空」

「ああ、『誰かに見られている気がする』のдарうつ？」

「全然信じてないじゃねーか！『気がする』を主張しないでくれ！」

「とにかく、トイレとか食事とか廊下を歩いている時に妙な視線を感じているんだ」

「具体的には観察してる感じの視線だよな。冷えていて小鷹君が目を向けると消えるのに目を逸らすと視線が戻る感じ」

小鷹君の説明に補足を付け足すと三人が妙な視線を送ってきた。

「何で知ってたんだ……？まさかお前が……！」

「アホか小鷹、お前を観察するメリットがないだろうが」

「学園に珍しい唯一のヤンキーってくらいなものね」

「ヤンキーじゃねえし！で、縁は何で知ってるんだ？」

「簡単だ、小鷹君をつけている奴を見つけて興味本位で俺がそいつを尾行した」

「普通に助けてくれよ！？」

「よく考える小鷹君、そんな馬鹿正直にやって楽しいか？マガジソでヤンキー漫画読んでる奴が急に魔法先生読むようなものだぞ？」

「例え方かわからないんだが……」

「まあようは面倒臭いから暫く何してるか見てただけ」

「最低だな！」

小鷹君がいいように弄ばれているのを知って反論するが星奈はそれを許さなかった。

「何縁バカにしてんのよバアアアカ！！気が付かないあんたが悪いんでしょうが！」

「こ、こつちだって色々と考えたんだよ！不良に目え付けられたとか風紀委員とか！」

小鷹君の必死の訴えも虚しく星奈はかなり際どい目つきで睨み返す。だがそれもつかの間、すぐにまたアレな表情で爆笑しだした。

「あははははははははは！バツカじゃないの！？小鷹バツカじゃないの！？目立つ新参者をシメてやるうなんて飼い馴らされた家畜の集まりみたいなこの学校にいるわけじゃないじゃないバアアアアアアカ！風紀委員もいーりーまーせーんー！プライドも何にもないで大人のことを聞く天然記念物みたいな集まりだからいりませーん！ひやははははははははははははははははは！何で頭が逆さまにー！」

もう人としてアレな感じで星奈が爆笑していたのでそのまま縄で天井に吊す。つーか同じ学校の奴を家畜とかすげえ……

「笑いすぎて喉渴いたろ？ほら、水」

「あだだだだ！小学生の頃のプールみたいな感じがする！鼻の中に水入ってなんかきちゃう？！なんかきちゃう！？」

逆さ吊りにした星奈の鼻の穴目掛けて水を注ぎ込んだせいで鼻水と水がコラボして随分と綺麗な顔が残念だがまあ問題ないだろう。

「まあとにかく原因は解ってるんだ、明日から暇なら……気が向いたら……いや、覚えていたら……多分手伝う……かな？」

「手伝う気がほぼゼロじゃねえか!！」

「まあ、落ち着け小鷹」

小鷹が発狂していると夜空がコーヒーを持って来た。なんかいつもの夜空じゃない感じの優しい空気で小鷹が更に泣きそうになっている。

「や、やめろよ……優しくするなよ……」

「気にするな、今は優しくする方がダメージがでかいだろう?」
知っていてやっているらしい。

「ああ!どいつもこいつも!！」

「ふ、自分より哀れな人間をみると人は優しくなれるというのは本当だな」

「お前は同情が時に露骨な悪意よりも人を傷つけるのを知っているからタチが悪い!！」

「まあもしかしたらお前に好意を寄せている人間が草場の陰からこっそり見ているという可能性もあるからいつの間にかリア充デビューもあるかもなあ……」

そう言うのと僅かだが確かに夜空の纏う空気に変化が生じた。

「恥ずかしい話だし一番ありえないな、もういい、俺一人で何とかする」

「まあ待て小鷹」

膨れっ面で立ち上がる小鷹を無理矢理押さえ込んで座らせる。しかも動けないよう肩を組んで隣に座りだした。

「同じ部で共に歩む同志が悩んでいるのだ、部長としては是非つ、つつつき合ってやろう」

若干赤くりながら答える夜空、しかも呂律が回っていない

「いいよ、俺一人でやる」

まだいじけてる小鷹はプイツとそっぽを向くが夜空はそれを強引に顔を合わせてしまう。

「休み時間は暇だな」

「結局暇つぶしじゃねえか！……ハア、まあ言った俺も悪いか……」

「そうゆう事だ、まあ諦める小鷹」

そうゆうと優雅に立ち上がり部室を後にする夜空

「ねえ縁……」

「ん？」

「今夜空の手と足が左右一緒に動いてたわよ」

「そうな」

間違いない緊張してただろうな。あと今頃一人で舞い上がってるだろう。多分叫んだり小躍りしたりするタイプじゃないから一人で屋上とかでにやけてるんだろうな……

「ところで縁」

「ん？」

「私はいつまでこの状態にいるわけ？」

「あ……」

見ると星奈は逆さ吊りの状態でスカートが逆さまでパンツ丸見え、しかしそんなことも気にならないくらい頭に血が昇ってグロッキーな星奈だった。

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ（後書き）

『作者が何をしたいかわからない！』

そんなふうに思っている方いませんか？

大丈夫、作者もわかっていませんから！（泣）

……………せめて定期的にあげれるようになりたいわ（泣）

第十話 原作の夜空カムバック（前書き）

タイトルは……原作のような彼女に戻りたいな……という願いです
（笑）

第十話 原作の夜空カムバック

夜空

「縁部員、肉……貴様ら今日がなんの日か忘れたか……？」

小鷹くんの悩み相談から一夜明けた朝、学園に登校していた俺と星奈は朝っぱらからとんでもないものを目にした。

星奈

「な、なんの日で言われても……」

星奈が言い返せない辺り異常事態だろう？だって目の前には

夜空

「肉う！！貴様昨日の事をもう忘れたか！どうせ貴様の頭は縁部員か縁部員の妄想以外ないのだろうが！昨日だったときメモのシーンを自分と縁部員に変えて妄想に浸り縁部員の使ったクッションを顔に埋めて涎を垂らしながら喜んでいただろうがこの淫乱肉！！」

星奈

「朝っぱらから校門で恥ずかしいからやめて!？」

朝っぱらからやたらハイテンションの夜空、どうやら昨日小鷹くんのリア充デビュー（予定）ってのが相当こたえたらしい。今、夜空は学園の制服に特攻服とチェーンを巻いた木刀とバンテージという殴り込みスタイルで校門の入口に仁王立ちしていた。『唯我独尊』『悪鬼羅刹』『南無阿弥陀仏』って……なんか微妙に違うし。

縁

「おはよう小鷹くん」

小鷹

「ああ……なんで夜空はこんな事に……」

縁

「部員の為に頑張ってくれる部長なんて部員としては喜ばしい限りだろ？と言っより説明したん？例の視線は学校始まってからだって？」

夜空

「報告は小鷹から受けている！！」

夜空が食いついてきちゃった！？

夜空

「だが縁部員考えてみる！敵は小鷹に何を思っって近寄っって来るか現状がわからん！よっって我々はたとえ早朝であろうとも小鷹から目を離す訳にはいかんのだ！！」

……ようは自分が見えないとこで告白でもされてしまうのが嫌なのな……？

夜空

「む、授業まであまり時間がないか……縁部員、肉、事前の連絡をしなかったのはこちらにも非があるが今回の活動は小鷹の今後の学園生活において非常に重要な案件だ！現時点を持って一時解散とし次回集合はホームルーム終了後の 九：二（マル・キュウ：フタ・マル）とする！！小鷹、教室へ行くぞ！」

そういつて夜空は小鷹を引つ張り教室へ向かう。モーゼが如く他の生徒の群れを割る夜空はある意味目立ちすぎていた……。

星奈

「な、なんで夜空はあんなやる気なのよ……」

隣には部室での行為を曝されて赤面している星奈が半ベソかいて立っていた。

クツシヨンに顔埋めてるのはいつもながらだが俺が座った椅子に顔つけて悦になるって……いつか星奈の家族と話し合うべきかもしれない。

ホームルームが終わると星奈が来た、俺は日直だったらしいので同じ日直と職員室へ向かう。背が小さく小学生にも間違われそうな少女……名前は知らない、顔は見たが覚えてない。決壊として『見ず知らずの他人』だ。あつちには楽しそうに『キヨネンノハナシ』とか言うのをしているがなんの話だろうか？……星奈は一人で大丈夫かな？

夜空

「では現時刻をもって作戦を開始する！！敵性戦力は発見次第殲滅せよ！見敵&必殺サーチ・アンド・デス！！ゆくぞ見敵&必殺サーチ・アンド・デス！！」

星奈・小鷹

「待って！」

突っ走る夜空を二人して止めた。

小鷹

「夜空！一回冷静になれ！落ち着こう？な？」

夜空

「小鷹？貴様にはわからないのか！？この妙な視線を……！私は自分が情けない、貴様がこんなにも好奇の視線に曝されて孤独な学園生活を送っていたとは！だが大丈夫だ小鷹！お前は一人ではない、私がいつだって隣にしよう！！」

告白にも取れる熱いセリフに顔を赤くしながらも小鷹は言い返す。

小鷹

「気持ちはいがたいけど落ち着け夜空、確かに視線は感じるぞ？でもこれは俺が言ってたやつじゃない……」

夜空

「！？まさか……敵の増援か！」

小鷹

「違う！普通の生徒からも注目されてるんだよ！主にお前の奇行で！」

夜空

「？」

不良ツラの小鷹くんが顔がいい黒髪の美少女と女王様扱いの変態……二人の美少女（笑）を連れている小鷹くんは無差別に注目の的に

なっていた。しかも星奈が『大事な用事があるからあんなたち虫けらども相手をしてあげてる暇はないの』とか言ってたから怨念めいた視線をあびながら休み時間を過ごしたらしい。ちなみに怨念めいた視線の主を敵と勘違いして夜空は狩っていた。俺はあの時初めてリアル『モン狩り』を見たよ、遠目からでよかった。

縁

「つーわけで彼は刺激的な毎日をハードボイルドに過ごしているわけだね」

????

「さすがです小鷹先輩」

小鷹

「いや、望んでやってる訳じゃないぞ!？」

午前中の話を聞かせながら俺は小鷹くんと一緒に彼と会話していた。

星奈

「縁……」

声をかけられて振り向けば顔面蒼白でぶるぶると震えていた星奈と「信じられないものをみた」という顔をした夜空がいた。

星奈

「縁……その子……誰？」

縁

「男子の制服着せて楽しんでるんだよ（嘘）」

星奈

「あ、あたしがいるじゃない！あたしが男子の制服着るわよ!？」

縁

「だって星奈は胸が大きいからブラがあってリアリティがないし（嘘）」

星奈

「ノーブラで一緒に歩くわよ！夏服で第二ボタンまで開けるし冬服なら素肌にブレザーでもいいから！」

小鷹

「なんの話をしているんだよお前らは」

星奈

「小鷹うるさいわよ！あたしの縁の隣というポジションが奪われそうなんだから邪魔しないで!？」

夜空

「肉、落ち着け。二人の性癖が予測不能でも私達が受け止めればいいだけだ。縁は貴様が、小鷹の性癖は私がフォローする」

縁

「あ、テンション戻ったんだ」

夜空

「……朝の事は忘れろ縁、さもなければ今ここで110番に私は電話

する」

やべえ目がマジだ

小鷹・縁

「忘れます」

夜空

「いいだろう。で、こいつは何なのだ？」

小鷹

「俺もそれを聞いているんだよ、なんか悩みが解決するから付き合えって言われてさ」

夜空

「なんの話だ……？肉、ブラを取るな戻せ」

星奈

「縁の隣のポジションに下着は邪魔なのよ……！」

女性としての羞恥心とかモラルは？

縁

「……………俺は今奥ゆかしい女性が好みだ」

そついうと星奈の動きが止まる。そして下着を付け直して服装を整え、物静かな雰囲気を出してきた。よし、これで暫く静かになる。

夜空

「で、こいつは結局なんなのだ？」

夜空がうんざりした顔で、小鷹くんは若干顔をしかめながら聞いてくる……俺は答えた。

縁

「んー、この子が今小鷹くんを付け回してる生徒。名前は楠幸村^{くすのきむら}。一年一組だ」

幸村

「楠幸村、一年一組です。皆様よろしくお願いいたします」

丁寧に頭を下げる。

「年下属性だったかぁー」と絶叫する星奈

「こ、こいつが犯人だと……」と推理ドラマ顔負けなリアクションの小鷹

だが一番リアクションが大きいのは……

夜空

「こ、こいつが犯人だと……か、可憐さ……純朴さ……純粹さ……お、女の子らしい……こいつが小鷹とリア充……ほ、ほうあぁあー！」

………夜空、パニックになりすぎだ。

第十話 原作の夜空カムバック（後書き）

さあ！今月からアニメですよ！！

仕事だからHDに録ろうwww

第十一話 思った以上に進められなかった(前書き)

100件突破ありがとうございます。
アニメ効果って凄い(笑)

第十一話 思った以上に進められなかった

夜空

「戦争を始めよう」

小鷹

「始めないからな！？やめろよ絶対に！な、まず落ち着け？」

小鷹が宥めると夜空は目からハイライトが消えて幽鬼のような表情になり始める。

夜空

「大丈夫だ……自分でも不思議なくらい落ち着いている……」

小鷹

「そういう命のやりとりの落ち着きじゃないからな！？落ち着け夜空、な？一回座ろ？」

肩を押さえながら座るように促す小鷹から視線を外して夜空は照れた態度で手を払う。

夜空

「小鷹……優しさも私は敵対行為とみなすぞ……優しい手つきで押さえ込むなんて、お前ソファーで何をする気だ！？」

小鷹

「お前の妄想で俺は何をさせられるつもりだ！？」

縁

「ナニだなんて小鷹くんのえっちー」

幸村

「ひとめを気にせずおなごをてごめに……小鷹先輩、さすがです」

小鷹

「俺は無実だからな！」

はい、こんな感じで今日の隣人部が始まっています。星奈？窓側に座って静かにしていますよ？声も荒げず静かなものだ、一体何があつたのやら……？

星奈

「縁？おしとやかな子が好きって話は？」

縁

「それは前話までだな、「前話！？」今はどうでもいいわ」

それを聞いた途端に星奈は人の膝に飛び乗ってきた。

星奈

「縁のひざ枕」 縁「頭撫でて撫でて」(・>「<・)」

小鷹

「……あの二人は放っておこう、えーっと……楠だっけ？」

小鷹くんが名前を確認すると楠幸村くんは財布を取り出して小鷹くんに渡した。

幸村

「三千円しかはいつていせんが、かんべんしてもらえますか？」

小鷹

「カツアゲじゃねえ！どこに財布巻き上げるようなシーンがあったよ！？」

夜空

「あ、あん？三千円で小鷹の何を満足させる気だ貴様、小鷹を福沢さんのいない財布に手を出す小物と一緒にするなよ？」

小鷹

「入っていてもやらねえよ！？クツソ話が進まない……………！」

縁

「まあ要は幸村くんは立派な日本男児になるという願いを叶える為に小鷹くんのストーキングをしていた訳だ」

小鷹

「説明ありがとう……………」

なんだ？話が進まないから進めたのに

夜空

「男児といたな……………」

縁

「ああ、男児だ」

夜空

「小鷹、今同性との恋愛がどんなリスクを負うものか説明してやる

から早まるな」

小鷹

「早まってるのはお前だ！？ホントにどうした夜空！」

星奈

「しっかし女みたいな男ってあたし初めて見たわ。つーか首を傾げるんじゃないわよ、やたら可愛いから……」

星奈もとりあえず納得したらしい。まあ、幸村くんは俺や小鷹くと違って『ついてない』けどな。

ん？何が？……言わせるなよ恥ずかしい（棒）

お、夜空が落ち着いてきたらしい。

夜空

「で、性別は男として、この男の娘は何故小鷹を付け回していた？」

幸村くんは表情一つ変えずに淡々と答えた。

「じつはわたくし、いじめをうけているのです」

幸村くんの言葉を聞いて特に小鷹くんの表情が憂鬱なものになる。

夜空はいじめは何処でもある当たり前のものだと肯定し、小鷹くんも納得せざるおえない心境らしい。

夜空の説明を聞きながら小鷹くんは皮肉混じりの台詞を言うと、憎々しげに夜空は小鷹くんを睨む……また会話が聞こえないあたり俺

は興味が無くなってきたらいるんだろう。

自分が傷付かずに他人を攻撃するのが本能的に大好きな『人』はみんな割と軽い気持ちで他人を傷つける。

気に入らない相手を叩いたり虐める相手の落ち度を見つけて大義名分を得ての虐めは更に楽しいだろう。

……余談だが星奈は虐めをしたことがない、虐めを受ける立ち位置になりやすいが、容姿や成績、親の権威で直接的な被害はない。そして虐める立場を嫌い、自分が虐める立場になる事もなかった。……正確には一度だけあったが……。

星奈

「縁……」

気がつくとも星奈が俯きながら俺の手を握る、いつもより泣きそうな顔をしていたのは多分俺の顔が怖いから、震えているのはきっとまた俺が冷たいから。

縁

「怖い顔してたな」

頭を撫でながらゆっくりと体を寄せる。強張っていた体を少しずつ預けてくれる星奈は俺を温めるように抱きしめてくれた。

小鷹

「幸村君！俺を付け回していた理由を教えてくださいませんか！」

夜空

「そつだな！まずは空気を換気することから始めよう！」

さっきまで喧嘩してたのにもう息を合わせていやがる、何故だ？

星奈、空気読むって何の話？

そしてさっきまで二組のやりとりを眺めていた幸村くんが答えると隣人部にまるでありえないものを見るかのような空気が生まれた。

幸村

「どつすれば小鷹せんぱいのように強くてかつこいいおとこになれるか、学ぼうと思ったのです」
あれ？さっきも俺同じ説明したのに何、この温度差……

第十一話 思った以上に進められなかった（後書き）

次こそは終わりたいです。

P.S.

ちよつとアンケートみたいなものです。

100件突破記念にオリジナルで書きたいのですが、読んでくれる方のリクエストを話にしてみたい……って願望があります。

無理難題を押し付ける感じで申し訳ありませんが私に「書かせてやるよ」もしくは「読んでやってもいいぜ」みたいなネタの要望があったらメッセージや感想に書いていただけないでしょうか？

完成がイメージと違ってしまつのは許して下さいm(_____)m

ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7699u/>

こいつに友達がいらないのはもったいない

2011年10月13日09時01分発行